

セッション G 「サン=シモン研究の現在 没後 200 周年によせて」

世話人・報告者：白瀬小百合（会員・学振特別研究員 PD）

報告者：中嶋洋平（非会員・同志社大学）、杉本隆司（会員・明治大学）

討論者：金山準（会員・北海道大学）

参加人数：25 名程度

本セッションは、19 世紀フランスの思想家アンリ・サン=シモン（1760-1825）の没後 200 周年に際し、彼の思想の再検討を試みることを趣旨とする。はじめに世話人がサン=シモンの生涯と著作について簡潔に紹介し、次いで中嶋、白瀬、杉本の順で報告を行った。

中嶋報告（「サン=シモンにおける「経世済民」の思想の萌芽 『ヨーロッパ社会再組織論』の位置づけをめぐる」）では、報告タイトルに掲げられたサン=シモンの 1814 年の著作の再読解が試みられた。『ヨーロッパ社会再組織論』は、科学に主軸を置いた前期思想から、産業に重要性を付与する後期思想への転換点としてしばしば位置づけられるが、前期と後期の断絶を強調するのではなく、両者を結ぶ懸け橋として再解釈することを中嶋報告は提案する。本著作はイギリスの立憲君主制をモデルとしながら、ヨーロッパ社会の経済的統合を志向している。これを「経世済民」の思想として読み直すことで、サン=シモンの前期思想と後期思想に通底する道徳的観点の存在が示された。

白瀬報告（「精神的権力と administration サン=シモンの産業社会構想を再考する」）では、サン=シモンにおける精神的権力について、管理（administration）の観点から考察を加えた。サン=シモンは旧体制社会において聖職者が担っていた役割（学識の発展、普及ならびに一般的観念の形成）を学者に委ね、産業的社会における精神的権力の担い手としている。この提案と、18 世紀末のカトリック支持者たち（ボナルド、ジュフロワ=ゴンサン）が提起した宗教のアドミニストレーション論との比較を行った。三者は精神的権力および精神的アドミニストレーションの再定義を行うという共通性を持つが、カトリック支持者たちは、詳細な制度設計により多くの関心を向けている。他方、サン=シモンの構想はあえて制度的な曖昧さを残すことで、世俗の権力を担う産業者と学者の協働によって成立する「産業的管理」の構想に強調点を置いている。以上を三者の共通点と相違点として指摘した。

杉本報告（「サン=シモン〈産業主義〉思想再考」）は、サン=シモンが 1824 年に発案した「産業主義（industrialisme）」概念に立ち戻り、経済的自由主義からの思想的影響と、後代における評価を再検討した。サン=シモンは古典派経済学における自由主義に、産業の原理に立脚した社会組織（＝反封建主義）を読み取ったが、自由主義もまた、封建主義的な権力構造と結びついた場合には批判の対象となる。そうした自由主義との差別化を図り、民衆の側に立つ自身の立場を明確化するためにサン=シモンが発案したのが「産業主義」の呼称であった。したがって、サン=シモンの「産業主義」を、それ以前のセーの経済理論からの発展または逸脱ととらえる読解（グイエ）はアナクロニズムであり、サン=シモンのように古典派経済学を社会学的に解釈することの可能性（および妥当性）が指摘された。

三者の報告に対し、討論者から以下のコメントと質問が提示された。サン=シモンが現代においても読者の関心を惹くものだとすれば、その要因は彼のさまざまな提題が持つアクチュアリティにあると考えられる。サン=シモンの思想には複数の側面が併存するが、ある側面を強調すると、矛盾を来す別の契機が見出される。これはサン=シモン個人の思想の

問題であるだけでなく、産業や社会の「組織化 (organisation)」という主題そのものにまつわる多義性・多様性であるとも言える。

【中嶋報告への質問】第一に、サン=シモンの前期思想における「無産者 (non-propriétaire)」が指し示す社会階層とはどのような層か。ブルジョワ層を含む概念であるのか。第二に、サン=シモンの思想における経済成長志向と、平和構想の繋がりをどのように評価することが可能か。いかなる成長が平和に資するか、ということを問う際、サン=シモンから得られる示唆はあるのか。

これらの質問に対して、報告者からは、「無産者」とはフランス革命期に煽動されて暴力に走ったような無教養な庶民層を指し、一定の知的水準に達しているはずのブルジョワ層は含まれないこと、また平和構築のためには、経済成長とそこから生み出される富の社会化を意識する必要があることが指摘された。実際、サン=シモンは一定の時期まで、有産者と無産者の別を問わず、有益な生産に携わる人びとを「産業者 (industriels)」として一括し、無為徒食の貴族的特権層とは異なる存在として位置づけた一方で、人びとの知的水準の違いを踏まえ、制限選挙制度の導入によって「無産者」を政治から排除しようとする一面も持っていた。さらに、今日では経済成長の弊害や脱成長がしばしば語られるものの、貧困層の境遇改善には経済成長が不可欠であるという点是否定しがたく、そうした層の救済なくしてある一国の社会の安定は実現しないはずであり、社会の不安定さこそが国際的な平和構築の阻害要因にもなることを踏まえるならば、この点もまたサン=シモンから得られる示唆として捉えうるのではないかと報告者は述べた。

【白瀬報告への質問】まず *administration spirituelle* (精神／宗教的アドミニストレーション) の表現をサン=シモン自身が用いているのかという事実確認、さらに「精神的権力」の問題がサン=シモンが構想する *administration* とどのように関係づけられているのか。精神的権力の必要性という議論について、A. コントにおいては専門家・科学者への「信頼」が前提として掲げられているが、サン=シモンにおいては「信頼」に対応するような、知の受け手側の態勢 (*disposition*) への問いは見出せるのか。

これらの質問に対し、*administration spirituelle* の語はサン=シモン自身の著作に見られないが、*direction spirituelle* (精神的指導) の語が *direction temporelle* (世俗的指導) と対で用いられていること、二つの *direction* の協力関係がサン=シモンの「産業的管理 (*administration industrielle*)」を支える構図を持つことを報告者が回答した。また、受け手側による「信頼」に対し、サン=シモンはコントほどの大きな強調を置いていないものの、客観的な科学による実証という要素が科学の正当性を担保しており、こうしたある種の権威性がテクノクラシーとサン=シモンの思想を結びつける所以となっていることを指摘した。

【杉本報告への質問】経済や社会の自己組織化を論じる際、プルードンにおいては相互性がその原理として掲げられているが、サン=シモンにおいて社会が自己組織化を可能にする原理とは何か。加えて、シェルドン・ウォーリンは「組織化時代の政治思想」の代表的存在としてサン=シモンを取り上げ、サン=シモンによる有閑者への批判が機能主義的観点からなされていることに注視している。機能を果たせない（あるいは逆機能を果たす）存在が社会の組織から排除される、というウォーリンの批判を逃れうるような契機は、サン=シモンの社会組織論に見出せるのか。

報告者からは、サン=シモンの社会組織の根幹にあるものが「産業の原理」であり、*industrie* の語源 (*industria*) じたいが内在的な構築化／構造化を含意していること、したがって自己

組織化の原動力であることが示された。ウォーリンの批判に対しては、報告者は「逃れられない」と認めつつも、サン=シモンのオルガニゼーション論を、あえて現代的な問題に引き付けつつ、現代の新自由主義的な風潮の中で労働者が社会に管理されるどころか、社会から見捨てられ生産活動にさえ加われない人々を例に、サン=シモンの思想に立ち戻ることも、時代に応じて必要である旨のコメントがなされた。

フロアを交えたディスカッションでは、活発な議論が交わされた。サン=シモンが目指した実証政治学と革命前の政治学との関連や対比、国際法や自然法を取り上げた議論の有無、スミスの思想との関連や共通点、封建体制の解体にともない福祉国家が志向されて行く際に生じてきた「働かない者」から「働けない者」へのまなざしの変化など、多岐に亘る観点からの質問、コメントが寄せられた。